

## 明治期熊本における中国語教育 (1)

野 口 宗 親

### Chinese Education of Kumamoto Prefecture in the Meiji era (1)

Munechika NOGUCHI

(Received September 1, 1999)

#### はじめに

昨今、一時ほどではないにしても、中国語熱は高い。大学の一般教養の外国語でも人気が高い。筆者が今を去る30数年前の学生時代、中国語をやっているという、変わり者に見られていたのと隔世の感がある。今の若い人に中国語をやることの抵抗感はあまりなさそうである。しかし、「君はなぜ中国語(中国)をやるのか」「何のために中国語を教えるのか」と問われ問い続け、未だに心にひっかかっている世代から見ると、この状況に時折、なんとなく不安な感を抱くことがある。また、「国際化」の時代でもある。ところで、「国際化」とはいったい何だろうか。

筆者がこのような不安や疑問を抱くのは、これまで日本における中国語教育がたどってきた歴史がふと頭をよぎるからである。いやな言葉だが「戦争語学」、聞こえがよければ「実用語学」(竹内好氏は「行商支那語」「兵隊支那語」の二つに分ける<sup>1)</sup>)、これが戦前の中国語教育が置かれた実態である。中国語はまともな語学として取り扱われなかった。ただ中国に対する侵略や戦争があるたびに中国語教育が叫ばれ、ブームが起こった。

江戸時代から受け継がれ、明治時代に国家体制整備のために再編成された漢文教育を通して、日本人の心の中に中国の古典に対する尊崇の念が醸成され維持されたのに対し、明治以降、現実の中国や中国人との接触において醸成された中国観は、西欧文化の流入、日中関係の変化に伴い、尊崇から侮蔑の念へと大きく変化を遂げた。古典の尊崇と現実の侮蔑、この両者が日本人の中国観の二重構造として明治以降分化、併存してきた。したがって明治以降の中国語教育は現実面での中国観を敏感に反映し、平和なときは貿易目的のために、戦争が起こると通訳養成といった国権を伸ばす(日本の国家に役立つ)ための安易な実用面だけが強調されてきたのである。

本稿で明治期熊本における中国語教育を調べたのは、特に、熊本県人が明治維新以降、いち早く中国・朝鮮に目を向け、積極的にかかわりを持ち、先に述べた日本人の中国観の形成に先導的な役割を果たしたと考えられるからである。本論に入る前に、熊本県人の中国(中国語)とのかかわりを年表風に概観してみよう。〈〉は日中関係、その他の出来事。

明治7年(1874) 宮崎八郎義勇軍を募り、「台湾征討」に参加。

明治9年(1876) 竹添進一郎(のちの朝鮮弁理公使、東京帝国大学文科大学教授)・津田静一、清国国内(特に内陸部の巴蜀地方<四川省>)を官遊、日本に紹介〔竹添『棧雲峽雨日記並詩草』。〈日清修好条約発効〉

明治10年(1877) <西南戦争>

明治13年(1880) 東京で長岡護美を会長とする興亜会発足。興亜会支那語学校開校。

明治14年(1881) 佐々友房、同心学校・済々黌〔明治15年〜〕で中国語教育を開始。

- 明治17年(1884) 宗像政(のちの東京府知事)・日下部正一ら、日本の民間人が初めて海外に設置した学校である東洋学館を上海に創立。清仏戦争起り、佐々友房が宗方小太郎・佐野直喜を伴い視察のため渡清。
- 明治19年(1886) 陸軍参謀本部の荒尾精(愛知県出身)が開いた軍事調査機関、漢口の楽善堂に8名の熊本県人が調査活動に従事。
- 明治23年(1890) 日清貿易振興のための人材養成機関である上海の日清貿易研究所の創立に多くの熊本県人(ほとんど済々黉出身)が参加。〈元田永孚起草の教育勅語〉
- 明治26年(1893) 東肥合資会社設立(東昌洋行。のち日清貿易東肥株式会社)。
- 明治27年(1894) 日清戦争の通訳官として熊本から多数が従軍。全通訳官の約2割(5・60名以上)にも及ぶ。軍事探偵の宗方小太郎が有名。〈日清戦争〉
- 明治28年(1895) 九州学院で通訳養成に向けての中国語教育開始(支那語学生速成科)。津田静一、日本領となった台湾を視察、製糖業を起す。
- 明治29年(1896) 宗方小太郎、中国における最初の漢字紙『漢報』を漢口で発行。翌年、前田彪の『閩報』(福州)発行。日清貿易東肥株式会社(社長は熊本商工会議所会頭の岡崎唯雄)設立(東肥洋行、明治35年解散)。
- 明治31年(1898) 東亜同文会設立に宗方小太郎・井手三郎・佐々友房ら参加。熊本商業学校、上海へ修学旅行(本邦最初)。〈戊戌の変法〉
- 明治33年(1900) 東亜同文会が南京同文書院を開設、熊本県は3名の留学生を県費派遣。
- 明治34年(1901) 東亜同文会が上海に東亜同文書院開設。
- 明治37年(1904) 井手三郎、邦字新聞「上海日報」を創刊。〈日露戦争〉
- 明治38年(1905) 熊本商業学校で中国語・朝鮮語が第二外国語として履修される。宮崎滔天らの尽力で、孫文が東京で中国革命同盟会を結成。
- 明治44年(1911) 肥後東亜同志会設立(発起人代表・井手三郎)。〈辛亥革命〉

熊本県人がいち早く大陸と関係を持った由来について、上村希美雄氏は次のように述べる。「九州のなかでもわが熊本県は、玄洋社があった福岡とならんで、いわゆる大陸雄飛の人士を多く輩出した地方として知られている。(中略)明治期の熊本人は、どうしてこのように大陸進出の先兵たる役割をつとめたのか。それにはやはり、明治二〇年代以降この地方の政治的主流を占めた国権主義的風潮の影響をふりかえらないわけにはいかない。維新のバスに乗り遅れた上に、十年戦争でも向背を誤まって藩閥政権のもとに屈した肥後士族たちは、その鬱勃たる覇気をアジア大陸へ向けることでみずからの功業意識を満たすと共に、国家が果し得ないでいる東洋経綸の先駆となって政府を鞭撻することに自己の活路を求めようとした。三〇年代からにわかに高まる対外強硬運動の一翼に、佐々友房率いる熊本国権党が常に位置していたことが、この例証となろう。(中略)一方、民権運動の血脈を受けた宮崎滔天は、明治三〇年亡命中の孫文を知るに及んで、中国を革命してアジア解放の根拠地とする理想をこの革命家に託し、三八年東京での中国革命同盟会結成にも重要な役割を果たした。しかし、彼のようなアジア連帯主義思想は県内ではむしろ少数派に属し、明治末期の熊本は、国利国益を支柱としながら大陸進出の好機を模索する人々の天下だったといつてよい。」<sup>2)</sup>

熊本におけるこれらの動きが後の韓国併合、満州国建国、日中戦争へと続く日本のアジア侵略の先駆となったことはつとに指摘のあるところであり、一地方ではあるが、その研究は日本人のアジア観(中国観)の変遷を考察するのにさまざまな手掛かりを与えてくれる。

ただ、熊本国権党(前身の紫溟会・紫溟学会)や熊本県人の大陸での活動について触れた論文は幾つかあるので<sup>3)</sup>、ここでは触れず、本稿では、年表のところどころに見られるように、熊本県人の大陸進出のさきがけとして、或いは歩調を合わせるように行われた中国語教育に焦点を絞り、それがどのような理由で始められ、どのように行われ、どのような変遷をとげたか考察してみた

い。なぜなら、年表で見られるように同心学校、済々黌、九州学院等で中国語・朝鮮語を教え学んだ多くの人たちが、東洋学館(亜細亜学館)、日清貿易研究所、東亜同文書院等の設立に関係したり、日清・日露戦争における密偵、通訳として活動したり、朝鮮においては閔妃事件を起こしたりしているからである。中国語教育の面でも、中国語教師となり、中国語教科書を著した者もいる。

明治時代の中国語教育については、六角恒廣氏が精力的に研究され、『近代日本の中国語教育』『中国語教育史の研究』『中国語教育史論考』等のすぐれた著書があるが、熊本の中国語教育についてはあまり触れられていない。また、頻繁に課程、授業科目が変更されたり、中国語が選択であったりして、関係者の記憶もあいまいで<sup>4)</sup>、中国語の授業がいつ開始されいつまで続けられたか、誰が教えたかなど、諸史料でほとんど記述がなかったり、あるいは間違いも多くみられる<sup>5)</sup>。そこで今回はまず当時の新聞や雑誌などにより、明治期の熊本における中国語教育の実態(開設校、時期、教師、生徒、教材等)を調査し、当時の中国語教育の内容、位置付け、役割を考え、ひいては中国語教育の今日的意味、国際化等を考える一つの手掛かりにしたいと思う。

明治期熊本の学校における中国語教育は、おおよそ三期に分けられる。六角恒廣氏の『近代日本の中国語教育』でも、明治時代の中国語を、明治前期(明治4年～19年)、明治中期(明治20年代)、明治後期(明治30年以降)の三期に分けて考察されているので<sup>6)</sup>、この分類に従い以下のように分けて考察していく。あわせて民間の中国語教育も考察してみたい。

- I 明治前期：同心学校・済々黌(明治14年〔1881〕～明治19年〔1886〕)における中国語教育
- II 明治中期：九州学院(明治28年〔1895〕～明治29年〔1896〕)における中国語教育
- III 明治後期：県費派遣留学生(明治33年〔1900〕以降)と熊本商業学校(明治38年〔1905〕以降)における中国語教育

なお中国語の呼び方は、明治期では支那語、清語、華語、漢語、北京官話などの呼称があるが、この論文の引用は原文のままを用いた。

## I 明治前期：同心学校・済々黌における中国語教育

### 1 同心学校における中国語教育：明治14年(1881) 教師：榊木某

明治の熊本の学校で、中国語の授業が最初に開設されたのは、大陸進出の原動力となった熊本国権党の創始者佐々友房(1854～1906)が明治14年(1881)2月開校した同心学校であるのは興味深いことである。まさに、この同心学校や済々黌における中国語教育こそ、熊本国権党系大陸実践集団を生み出す実質的な源流であった<sup>7)</sup>。明治32年(1899)3月に書かれた肥後生稿『清国ニ於ケル肥後人』にも、「今ヤ、我が熊本人ガ世人ニ先テ、東亜大陸ノ事情ニ精通シ、其ノ一挙一動、稍々世人ノ注視ヲ惹クニ至リシモノ、其ノ基因スル所ハ、全ク同心校済々黌ノ学窓ノ下ヨリ、発シ来レル賜ナリト謂フモ、決シテ過言ニアラザルヲ信ズルナリ」と、その先見の明を称えている<sup>8)</sup>。

佐々友房は安政元年、熊本の内坪井に生まれた。8歳の時、時習館に入り、居寮生となった。時習館廃校後、国学の林桜園に学び、水戸に遊学した。西南戦争(明治10年)には、学校党の士族を中心とする熊本隊の一番隊長として参戦、捕らえられて10年の懲役刑に処せられながら、負傷による責付出獄願いを認められて明治12年(1879)、熊本に帰ってきた。西南戦争によって武力

による反政府運動の限界、熊本の荒廃を目の当たりにした佐々は、戦後の自己の方向をまず子弟の教育に求め、明治12(1879)年12月5日、私立同心学舎を熊本区高田原相撲町に開設した。その建設趣意書は、(1)人の「靈妙な真性の光輝」を発揚揮霍させるには学問が必要である。(2)官立学校に入学できないような子弟教育の道を開く。(3)我が皇威の尊厳を益し、我が国権の拡張を謀る。というもので、明治政府の欧化政策に反対し、当時の自由民権運動への対抗を意識している。

この同心学舎は、「時習館の復興」を意識したものである<sup>9)</sup>。

時習館は宝暦6年(1756)、細川重賢によって創始された藩校であるが、初代教授の秋山玉山による「時習館学規」に興味ある項目がある。それは授業に中国語を取り入れることを主張していることである。学規の注釈「時習館学規科条大意」を引く。

漢語師 背書は必ず華音を用ゆ。然らざれば四声混同し、助語或は脱し、字位或は易<sup>かは</sup>る。これ倭訓環廻の読の陋なり。文章に施すべからず。故に生員みな華音を用ゆべし。我藩幸に崎陽<sup>なごやま</sup>に近し、此師を置くこと難からず。延喜式大学寮に漢語師あり、故に今此の師を立つ。未得其人かるが故に先姑く和音にて従頭直下に背誦せしむ。庶くはこれを文辞<sup>ぶんじ</sup>を措<sup>お</sup>くに脱誤顛倒なからんことを。它日必ず訳学を置くべし、此方四道の学に明法あり唐律なるべし。今や明律を学ぶに華語に通せされば義理のみを以て推すべからざるものあり。故に学校を設け此の師なきは一大欠事なり<sup>10)</sup>。

この秋山玉山の「文章は頭から華音(中国語)で読むべきで、訓読のように語順転倒して読むべきでない。したがって漢語師(中国語教師)を置くべきである」という主張は、徂徠学派の「漢文直読」の主張に基づくものであった。これが実施されれば、藩校の教育に中国語教育が取り入れられた珍しい例として特筆される事象であったが、彼の後任教授の藪孤山以降、純粹の朱子学派の人達が時習館の教師の主流を占めたため、実行に移されなかった。この朱子学派の人達の頑迷さが明治維新に熊本が乗り遅れたことの一つの要因である。

「時習館の復興」をもって任ずる同心学舎・同心学校・済々黌は漢学に力をいれている。この中から狩野直喜(明治17年月卒、京都大学文科大学教授)、古城貞吉(明治18年月卒、東洋大学教授)、宇野哲人(明治27年卒、東大教授)といった、“漢学界の「肥後の三羽鳥」”<sup>11)</sup>と呼ばれたすぐれた漢学者が出ているのも興味深い。漢文と中国語、この二つを同居させ双方の面で特出する人材を出した学校は、明治社会の中国観の分化を象徴しているようである。もっとも狩野直喜が当時軽視されていた口語(俗語)で書かれた中国の小説戯曲研究、敦煌文書の研究に力を入れ、成果を上げているのは、明治33年(1900)の清国派遣留学生で中国語に堪能であったこともあろうが、彼が学んだ同心学校、済々黌で中国語が開設されていたため、他の漢学者に較べて中国語に対する抵抗感がなかったのも影響しているのではないだろうか<sup>12)</sup>。

さて、同心学舎は明治14年(1881)2月、組織を改め、同心学校と改称したが、ここで初めて中国語と朝鮮語<sup>13)</sup>の両国語を選択科目として教授した。

佐々の「済々黌歴史」(明治21年5月28日稿)に次のように述べる。

二月校員諸氏ト議スル所アリ将来ノ国運ヲ想像シ本邦ト支那、朝鮮トノ關係密接ナルヘキヲ察シ、我校科程ノ外ニ生徒ノ冀望者ヲ募リ兩國ノ語学ヲ学ハシメント欲シ十数人ヲシテ支那語ヲ熊本鎮台支那語学教師榎木某ニ学ハシム又朝鮮人吳鑑氏(氏ハ初メ李東仁氏ト共ニ我邦ニ来リ東本願寺ニ寓ス余高橋長秋氏ト本願寺ノ役僧奥村某氏ニ就キ招聘ス吳氏帰國ノ後、十七年ノ變ニ方テ事ニ死ス氏ハ同國開化党ノ一人ナリ亦惜ム可哉)ヲ聘シ之ヲ区内新町ニ寓セシメ本校生徒八九人ヲ撰ミ就テ語学ヲ修メシム氏去ルニ及テ從テ朝鮮ニ遊フ者七人ナリ<sup>14)</sup>

このように佐々が目を海外に向け、同心学校に中国語を開設するに至った契機には、明治13年(1880)3月9日、東京で発足した興亜会(明治16年〔1883〕1月亜細亜協会と改名)の影響が考えられる。興亜会は近代日本における最初のアジア主義組織で、欧米のアジア侵略に対抗する

ためにアジアの振起、独立、提携を企図し、日清両国政府の親善促進を図ろうとする曾根俊虎・渡辺浩基らによって設立された。もちろんその背景には日本の国権の回復、伸張があるが、初代会長は熊本旧藩主細川斉護の第六子で、実学派の流れを汲む長岡護美であった。その興亜会の活動の一つに、「支那語学校」の開設(明治13年〔1880〕2月16日開校)がある。興亜会設立緒言に次のように述べる。

(前略) 今日急務において、亜州諸邦の士を連して、協合共謀し正道を興して衰退を拯わんとせば、則ち先ずその情勢を知らざるべからず、その情勢を知らんと欲せば、先ずその言語に通ぜざるべからず、本邦には欧米諸州の語を能くする者これありて、支那朝鮮および亜細亞諸国の語を能くする者は甚だ少なし、何ゆえなるや、校舎の設、未だ全備ならざるなり、豈に遺憾ならずや、今特に東京に一校を創立し有志を招集し、支那語学を授け、……<sup>15)</sup>

そして、この年、興亜会会員吉田義静は帰郷して佐々らに興亜の急務を遊説している。

十三年会員吉田義静氏、熊本ニ帰テ遊説シ、白木為直(筆者注：のち紫溟会初代会長、県会議員)、佐々友房ノ諸氏ニ就テ興亜ノ急務ヲ唱道シ頗ル識者ノ注意ヲ喚起スルモノアリ。佐々氏亦タ大ニ時局ニ感スル所アリ。以為ク我熊本ハ十年ノ戦後其ノ余焰未タ銷セス將ニ党争ニ傾カントスルノ勢アリ。如カス此志氣ヲ海外ニ向ハシメ清韓ニ向テ勢力ヲ樹立セハ、以テ世人ニ対シテ先鞭ヲ着クルコトヲ得ヘシト<sup>16)</sup>。(傍点筆者)

吉田義静は熊本出身、当時興亜会支那語学校教授の任にあった(のち揚善社社長)。彼は「就トヒ学校ニ於テ一人学生ガ清韓安南印度等諸国ノ言語ヲ熟知シ其弁舌ヲ懸河ニシ得ルモ亜細亞ノ振作興起ノ一段ニ於テハ未タ功効アリタリト云フ可カラズ其学生ヲ興亜ノ事実上ニ従事セシムルニ至リ始メテ本会中ノ一部分ナル学校ノ功効ト謂フ可キ……」と、興亜学校の設立の目的は単なる語学知識の教授ではなく、修得した語学を使って興亜主義を実地で実践する人材を養成することだと述べている<sup>17)</sup>。興亜主義とは、日本国家の強大化を至上課題とする国権拡張主義であるが、当時では、日本と同じ不平等条約体制下にあるアジア諸国との提携によりヨーロッパのアジア侵略に対抗し独立を回復しようとする対外政略であった。

佐々はこのような興亜会の活動に刺激を受けて、興亜会に入会するとともに<sup>18)</sup>、同時に同心学舎を衣替えさせ、翌明治14年(1881)1月に開校した同心学校の授業科目に中国語・朝鮮語を加えたのであろう。この興亜会・支那語学校との関係は、明治14年(1881)9月1日発足した皇室中心主義、国権主義、アジア連帯主義を掲げる佐々等の創設した政治結社、紫溟会(明治17年〔1884〕3月に紫溟学会と改称)の発足とそれを実践する子弟を育てる学校組織である同心学校、済々黌との関係に重ね合わせられる。

紫溟会の機関紙「紫溟雑誌」には興亜会と同じようなアジア連帯主義の主張が見られる。上村希美雄氏は次のように述べる。「『紫溟雑誌』のアジア同盟論は『東洋之一大機会』(四号、丸山武)、『東亜細亞政略』(九号、高浜恒蔵)、『対朝鮮之政略』(十七、十八号社説)等に見ることができが、いずれも日・中・朝鮮の三国が内政非干渉、外交相互協力の原則のもとに同盟し、東アジアの全力を集めて西欧の野望を挫くことを力説、社長兼主筆(筆者注：津田静一)の思想的影響が窺われる。彼はさらに、このアジア連合の上に立つ『万国共和政府』設立(二三号、『我党ノ共和論』)の提唱を行った。…しかしわが国の軍備が整うにつれ、紫溟会のアジア連帯論は次第に日本を東洋の盟主にしようというナショナリズムの方へ傾いていった。明治十九年長崎で清国水兵とわが官憲の衝突事件が起こった時中国を擁護し、その鉄道敷設を祝して『清国の富強は即ち我が黄色人種の富強なり』という社説を掲げた『紫溟新報』(『紫溟雑誌』後継紙)も二十年代に入ると日清主戦論・対外強硬運動の先鋒に転ずる。…もともと国権拡張論者だった同会のこうした変質は、あるいは当然のことというべきかもしれない。」<sup>19)</sup>

このように、明治14年(1881)1月開校の同心学校における中国語開設は、興亜学校付属の支那語学校の影響を受けて創設されたものと考えられ、佐々の当時のアジア観や在野性を持った教育観がうかがえる出来事である。また当時において全国の官私立学校で中国語が開設されていたのは、東京外国語学校を除き、興亜会支那語学校と済々黌だけであった(福沢諭吉が明治12年設置した慶応義塾附属支那語科は、明治14年に閉鎖)。同心学校の教育について宇野東風は「生徒全数、百名許にも及んで居た。学科は読書、作文、数学の三科、其れに支那語、朝鮮語位で今日の普通科に比して、余程単純なものであった」と回想している<sup>20)</sup>。

同心学校における中国語の授業の詳細はわからない。先に挙げた佐々友房の「済々黌歴史」以外に資料がないので、諸文献すべてこれによっている。これによると、中国語の教師は熊本鎮台支那語学教師の榎木某。希望者を募り十数人が学んだ(百余人中)ということで、選択であったことがわかる。教師の榎木某なる人物については、いろいろ調べてみたがわからなかった。佐々の記憶でも榎木某と名前が思い出せない程度の付き合いであったようだ。

陸軍の参謀組織が計画的・組織的に中国などへ将校を派遣して諜報活動をおこなったのは明治6年(1873)からである。「隣邦支那の軍事研究は当面の要務なり」との案が陸軍卿山県有朋に具申され、その第一着手として、9名の将校・下士官が中国に派遣された。翌7年も8名が派遣されている。明治11年(1878)に参謀本部が設置されると、中国等に対する諜報活動は、より強化される。明治12年(1879)には、東京外国語学校の生徒12名、その他から4名、計16名を選んで北京官話学習の留学生として北京に派遣した(この中に後に済々黌に中国語教師として赴任する御幡雅文〔おばたまさふみ〕が含まれていた)。これら留学生は帰国し、陸軍の鎮台や士官学校などで中国語を教えた<sup>21)</sup>。榎木某の名は上記中国派遣の人員の中に見えないが、彼が御幡雅文と同様、熊本鎮台の中国語教師であったことは、同心学校・済々黌と軍のつながりを示し、中国語を学び大陸に出掛けた人の中に軍の大陸政策の協力者が多かったことと関わりがあろう。

ここで、同心学校で中国語を学んだと思われる生徒(十数人)の中で、主な3人について事績を記しておく。

1 佐野直喜(1863~1934) 熊本市薬園町出身。明治13年同心学舎入学。同17年佐々友房に伴われて、宗方小太郎と共に上海に渡航。そのまま中国に残り、大陸・日本・台湾間を往復した。日清・日露戦争で通訳官。のち安田銀行熊本支店長を務めた。「我々の学校に当時に於いては珍しい支那語と朝鮮語の科目を置いて、生徒にそのいずれか一つを学ばせたのであります。その時、私は支那語を選んで、明治十七年頃まで続けてやって居りました」(佐野直喜「東洋大局への着眼」、『克堂佐々先生遺稿』580頁)。

2 宗方小太郎(1864~1923) 宇土出身。いわゆる大陸浪人の代表的人物。明治17年佐々友房に伴われて、佐野直喜と共に上海に渡航。明治21年荒尾精の楽善堂に身を寄せ、明治23年日清貿易研究所の設立に参加した。明治26年海軍嘱託として諜報活動に従事、日清戦争では清国の軍事機密を探り、広島大本営の天皇に中国服姿で拝謁、その功をねぎらわれた。明治29年漢口で邦人による最初の漢字紙「漢報」を発行した。明治31年の東亜同文会、明治34の上海東亜同文書院の設立に参画、晩年上海に東方通信社(現在の共同通信社)を設立、社長となりそのまま上海で客死した。膨大な宗方小太郎文書が残されている。「波多博の話によると、宗方は同心学舎時代からすでに佐々友房のもとに入門したとみられる」(馮正宝『評伝 宗方小太郎』、1997年、熊本出版文化会館、62頁)。

3 奥村金太郎(1867~1917) 宇土出身。「氏(筆者注:佐々友房)の創立に係る同心校(済々黌の前身)の生徒をして支那語を学ばしめたことがあったが、君は同志と共に同校に入学して支那語を学び」(対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』下、昭和11年、546頁)、明治21年緒方二三、片山敏彦らと上海に渡航。苦学して新聞通信員などをした。日清・日露戦争では陸軍通訳官。台湾で台湾日報主筆、台南新報主筆・副社長などを務めた。

佐野と宗方は、佐々が清仏戦争視察の折、将来の布石として中国に残した門下生で、いわば熊本県人大陸進出の先陣となった。

## 2 済々黌における中国語教育：明治15年(1881)～明治19年(1886)

上林大三郎と中国語教育：明治15年(1881)5月～明治17年(1884)

同心学校は資金の面や学内のいざこざで行き詰まり、明治14年(1880)12月閉校したが、同年9月1日発足した紫溟会の学校組織として、済々黌が明治15年(1881)2月11日開校した。3ケ年で卒業とし、当初入学者は60余名であった。

済々黌の教育方針は忠君愛国の士を養成し、国家有用の人材を育てて世に出す(皇室の干城、国家の柱石となる)点が強調され、紫溟会の天皇中心、国権主義という政治目的が、直ちに教育目標に置き換えられたものであった<sup>22)</sup>。

この済々黌のカリキュラムの中に、同心学校に引き続いて、中国語が取り入れられた。ただ、朝鮮語のほうは廃止された。「私立中学済々黌規則」(『済々黌百年史』34頁)を見ると(抜粋)、

## 通則

第三条 本校ハ普通中学科及、専門科英学支那語学ヲ教授スル所トス。

## 教則

第三十五条 学科ヲ分テ正則変則二種トシ各課程ヲ三級トシ、三ケ年ニシテ卒業スル者トス。

第三十六条 正則ハ経学史学文章理学地学法律経済数学体操ノ教科トス。

第三十七条 変則ハ経学史学文章数学英学体操ノ教科トス。

第三十八条 右本科ノ外、予科専門科竝ニ支那語学ノ三科ヲ置クモノトス。

第三十九条 専門科ハ本科卒業ノ後、其希望ニ任セ入科セシムルモノトス。但し二教科以上科目ヲ修ムルモ妨ゲナシ。

(中略)

第四十四条 本科正則変則予科ノ書目、竝専門科支那語科ヲ設クル左ノ如シ。

(中略)

## 高等専門科

経学、史学、文章学、経済学、法律学、数学、英学、支那語学(会話)。

明治十五年二月

とあり、当初から、中国語は選択の科目に入っている。英語と違い、「支那語学」は括弧書きでわざわざ「会話」としてあるのは、いわゆる「実用語学」であることをことわっているのであろう。

中国語の教師は上林大三郎(かんばやしだいざぶろう)で、勤務した期間は、『済々黌同窓会員名簿』(昭和二六年八月調)の「旧職員」の項を見ると、「上林大三郎 支那語 明治十五年一月(就職) 明治一七年(退職)」とある。ところが実際は、明治15年1月には上林はまだ赴任しておらず、ようやく5月に入って授業が始められたようである。それは次のような新聞広告(「熊本新聞」明治15年5月18日)によってわかる。

今般本黌ニ於テ東京興亜学校卒業生上林大三郎氏ヲ聘シ支那語学(官話)相始候又英学モ過日来教授致シ来候ニ付キ希望ノ人ハ直ニ本黌ニ来リ規則等一覽アル可シ。

五月十一日 熊本区高田原相撲町 済々黌

また、『紫溟雑誌』(明治15年5月21日)にも、「これまで教員がいなくて授業を見合わせていた」と述べている。

済々黌の中国語教師に赴任した上林大三郎についての詳しい事績はわからないが、熊本出身、明治13年(1880)2月16日開校の興亜会支那語学校(明治15〔1882〕年5月14日閉校)を卒業した<sup>23)</sup>。「熊本新聞」(明治14年11月30日)の「雑報」に「興亜会支那語学校に入りて勉励せし上林大三郎氏は支那語を卒業し来月上旬頃当県下に帰り支那語学校を設立さるるよし」の記事が出ているので、明治14年(1881)12月上旬熊本に帰ったようである。「支那語学校」の設立はひとまずあきらめて、翌15年(1882)5月済々黌の中国語教師になった。

彼は筆まめであったらしく、調べただけでも都合9回、「熊本新聞」「紫溟新報」に次のような寄稿文が掲載されている。その題は、明治14年3月1・2日(熊本新聞)創為ノ才養サル可カラサルノ説、明治15年10月26日(紫溟新報)我國民之一大急務、明治16年1月23日(同)腕力論、同年2月21日(同)日本魂論、同年6月20日(同)成業セザル理由、同年9月6・7日(同)朋党論、同年9月15日(同)精神保健ハ一國ノ元氣ヲ興スノ本、同年10月4日(同)忍耐ハ百事ノ父、同年10月19日(同)機論というものである。

この中で、「紫溟新報」明治15年10月26日の記事「我國民之一大急務」では、次のように述べている。

(前略)日清ノ親和ヲ計ラバ必ズ彼我交通ノ便ヲ計ルニアリ彼我交通ノ便ヲ計ラバ必ズ日清其語ヲ学ハシメ彼我ノ事情ニ熟通スルニアルナリ矣是レ即チ我國民ノ一大急務ナリ」

夫レ我熊本ニ一ノ東洋語学ヲ設ケ諸邦ノ語ヲ授ケテ専ラ亜州ノ深睡ヲ攪攪シ東洋ノ連衡ヲ計リ衰弱ヲ強固ニシ文運ヲ進捗セシメ而シテ國各四隣ヲ以テ堅守ノ計ヲ為シ彼ノ泰西驕肆ノ列強ヲ圧倒シ彼ヲシテ復タ我亜州全土ニ手ヲ下スコトヲ得ザラシムル而已ナラズ又タ彼ヲシテ東向我亜州ヲ拱揖拜跪角ヲ崩スノ暇アラザラシメント欲スルニ在リ矣是レ則チ我輩ノ宿志早晚其志ヲ遂ント欲スル所以ナリ

これは先にあげた興亜会設立緒言とほぼ同じ趣旨。語学を学び、各国の「交通の便」を計り、アジアを振起し、互いに四隣を防波堤として西欧と対抗しようというもので、興亜会支那語学校の出身者として、会の主張を広めようとする上林の面目躍如たる文章である。初期の佐々もそうだが、当時の人の西欧の進出に対する強い危機意識を端的に示している。

彼が用いた教材について、『紫溟雑誌』9号(明治15年5月21日、20頁)に次のような記事がある。

濟濟覺ニ於テ英学ノ科ハ過日來既ニ授業ニ懸リ生徒モ追々進歩セルニ支那語学ノ科ハ教員ノ手足ラザルヨリ是迄授業ヲ見合セ有リシ処今回東京興亜校卒業生上林大三郎氏ヲ聘シ既ニ支那語学ノ教授ヲ始メシニ段々希望ノ者モ有テ前途大ニ隆盛ニ至ル見込ナルガ其教則ハ亜細亞語言集ヲ以テ課程書トシ先ツ散語篇ヨリ入り問答篇、讀散語、談論篇、ト序ヲ逐テ進ミ傍ラ三字経、千字文、四書、五經其外小説詩文等ノ素読ヲモ習ハシメ又高等ニ達スル者ニハ照会文ノ作方等ヲ学ハシムルヲ以テ支那ニ通商ノ志アル人ハ勿論正則ノ支那学ヲ修メ他日亜細亞ノ大陸ニ向テ大ニ我主義ヲ伸ヘントスル者ハ就テ之ヲ傳習セバ豈ニ啻ニ我ノ幸ノミナランヤ。

これを見ると、テキストには広部精『亜細亞言語集 支那官話部』(7巻7冊)を用いている。『亜細亞言語集』はトーマス・ウエード『語言自邇集』(1867)を下敷きにしたもので、明治12年(1879)6月出版された(～13年8月)。適当な北京語のテキストがなかった当初は『語言自邇集』を直接に学んでいた。その後、この本を底本として、日本人の手の加わったテキストが生まれた。その代表的なものが『亜細亞言語集』であり、明治の時代を通じて、かなり広く読まれた。各巻の目次は、巻1：散語、巻2：続散語、巻3：問答、巻4：談論、巻5：続談論、巻6：平仄編、巻7：言語例略のようにになっている。「散語」・「問答」・「談論」という『自邇集』のもつ型式と内容は、そのまま、明治初年の日本語の中国語教育に採り入れられ、近代日本の中国語教育の素地をつくったといわれるが<sup>24)</sup>、これをそのまま踏襲している。また『亜細亞言語集』をテキストとして用いる傍ら、三字経、千字文、四書、五經などの文語による古典(素読<音読>)も習わせるのは、興亜会でのやり方と同じで、当時としては一般的であった。というのは明治十年代当時の日本は、その前の江戸時代から十数年しか経ておらず封建時代の儒学がまだ中国の学問として色濃く残っていたからである<sup>25)</sup>。照会文というのは公用文のことで、ここでは商用文の意味で使っている。

上林大三郎は興亜会支那語学校を卒業しているが、六角氏によると興亜会支那語学校の授業は、テキストには、トーマス・ウエード「語言自邇集」の「散語」の部分だけを、興亜会支那語学校



編輯「新校語言自邇集散語之部」(明治13年4月刊)として発行し、それを用い、これ以外には、「三字経」・「千字文」・「中庸」の音読がおこなわれ、また、6字話(六字一句の短文)から問答体の文章を読むやりかたがおこなわれたとされる<sup>26)</sup>。従って、上林はテキストには興亜会支那語学校で用いたものでなく、新しく出された『亜細亜言語集』を用いたようである。

上林は明治16(1883)年3月17日付「紫溟新報」に、「支那語学教授広告」として、「生午前支那語教授ニ他出シ其余ハ用事無之ニ付該学ニ志スノ人ハ自宅ニ於テ教授致テモ不苦候也 高麗門知応院馬湯 三月一日 上林大三郎」なる家庭教師のアルバイト広告を出している。

また、明治16年(1883)5月17日の「紫溟新報」に池辺春義等が目下出願中の私立詳證学舎という塾の規則が掲載されている。見ると、「第一条 本舎ハ数学を専門ニスト雖モ亦支那語学英学理学普通ノ諸学科ヲ設ケ之ヲ教授ス」とあり、続けて5月25日の同紙には「支那語学教科程」として「第六級(散語) 亜細亜言語集卷一(散語) 六級話 第五級(問答) 亜細亜言語集卷三 第四級(散語) 亜細亜言語集卷二(散語) 綴字和譯漢語 第三級(談論) 亜細亜言語集卷四(漢語) 和譯 第二級(談論) 亜細亜言語集卷五六 會話 第一級(言語例略) 亜細亜言語集卷七(言語例略) 紅樓夢 右同小史」といったカリキュラムが示されている。ところが6月28日の同紙では池辺春義本人が公立玉名中学校の教師に任じられたので、熊本区塩屋町裏一番丁に私設の詳證学舎は転舎するという記事が出て、6月30日の「転舎広告」では「支那語ヲ廃シ更ニ漢籍科ヲ設ケ…」と、中国語はほんの短命で終わっている。

ところでこの池辺春義という人は、佐々の「済々黌歴史」に、「十六年二月…池辺春義(白木義一氏職ヲ官衙ニ奉スルヲ以テ)ヲ英学教師ニ聘シ」とあるので、当時済々黌の英語の教師をしていた池辺春義と同一人物であろう。とするとこの詳證学舎で中国語を教えたのは、同僚の上林大三郎の可能性が高い。済々黌での授業と同じく、テキストは『亜細亜言語集』を用い、散語、問答、続散語、談論の順序も同じである。『紅樓夢』のような白話小説を教材に用いるのは、唐通事以来の伝統的なやり方を踏まえている。

上林大三郎は佐々の「済々黌歴史」によると、「(明治十七年)4月…陸軍御雇御幡雅文氏ヲ(上林大三郎氏辞スルヲ以テ)支那語教師ニ聘シ」とあるので、明治17年春以前に辞職しているようだ。その後は、明治27年(1894)11月10日の「九州日日新聞(「紫溟新報」の後身)」に「上林氏の出發」と題し、「熊本郵便電信局在勤の上林大三郎(かんばやしだいでいざぶろう)氏は嘗て支那語を修め熟達する所ありし人なるが今回大本营より急電を以て召出されたるを以て昨日一番列車にて当地を出発し広島に赴けり」とあるので、当時熊本市船場川端町にあった熊本郵便電信局に勤務していたようである。日清戦争の通訳官として広島に置かれた大本营に招集された時、かつて日清の親和を説いた彼の気持ちはどうであったろうか。

#### 御幡雅文と中国語教育：明治17年(1887)4月～明治19(1886)年9月

明治17年(1884)4月、済々黌ではまた学科を改編している。「四月又学科ヲ改正シ正則ヲ本科トシ更ニ皇典、經濟、習字、歩兵操練ノ四科ヲ増置シ数学ヲ算術、代数、幾何ノ三科ニ分ツ變則ヲ改メテ英学科トス又支那語学科ヲ置ク…陸軍御雇御幡雅文氏ヲ(上林大三郎氏辞スルヲ以テ)支那語教師ニ聘シ」(『済々黌百年史』所収「済々黌歴史」78頁)。この学科改正で、全国でも最も早い支那語学科の設置となり<sup>27)</sup>、本格的に中国語が学ばれたようである。興亜学校の速成の中国語を学んだだけの上林大三郎と東京外国語学校出身で参謀本部から清国に留学生として派遣された御幡雅文とでは、語学力の差があったと思われる。「学ぶもの二十数人の多きに及ぶ<sup>28)</sup>」と記されている。済々黌で多くの人々が大陸へ出掛けていったのは彼の影響力が大きかった。「従来、熊本で

は濟々黌の教師神林某が支那語を教えてゐたが、御幡が熊本に来るに及び、始めて本格的に支那語を修むるの道が開け、同地方の青年志士の間には支那語を解する者が増加するに至った。後年日清戦争の起るに及び……熊本方面から通訳を志願して来た者は、概ね相当な実力を備へてゐて直に実際に役立つが、是れは御幡が熊本在住中熱心に支那語の普及を図つた為めで」と記されている<sup>29)</sup>。

『濟々黌同窓会員名簿』（昭和26年8月調）では、彼が濟々黌で教えた期間は「私立濟々黌旧職員 御幡雅文 支那語 明治17年4月（就職） 明治19年9月（退職）」となっている。しかし後に述べるように、明治20年の春頃まで教えていた可能性が高い。

御幡雅文（1859～1912）については、六角恒廣氏の近著『漢語師家伝』（東方書店、1999年）に7人の中国語教育の先人があげられ、中に「御幡雅文—上海の語学の達人」として一章が設けられているので、詳しくはこれに譲り、ここでは簡単に略歴を述べる。彼は長崎出身、安政6年4月3日生まれ。明治12年11月、東京外国語学校上等三級在学中に、参謀本部より北京官話修得の留学生16名の1人として北京へ派遣された。帰国して明治15年熊本鎮台に赴任、そこで歩兵第十三連隊附陸軍少尉の荒尾精と知り合い中国語を教えた。また、明治17年から濟々黌でも教えた。明治19年濟々黌で中国語が廃されると、明治20年長崎に帰り、長崎市立商業学校で教鞭をとった。明治22年荒尾精に誘われ、日清貿易研究所に入った。日清戦争では通訳官。戦後台湾の総督府に翻訳官として赴任した。明治31年三井物産上海支店の社員教育施設三井書院に務め、明治34年上海に東亜同文書院ができると講師として出張講義した。明治45年長崎で死去。

『漢語師家伝』では御幡雅文が熊本在住中、濟々黌とともに、明治18年（1885）9月熊本市立商業学校でも教えたことになっているが、これは間違い。『東亜先覚志士記伝』で「明治二十年長崎に帰って浪人中、長崎市立商業学校から招聘されて支那語を教へ又た自宅に有為の子弟を集めて支那語を授け対支政策を鼓吹した。日清役殉難の烈士鐘崎三郎が彼の門下生となったのは、この時代のことである」<sup>29)</sup>と述べるように、長崎市立商業学校とするのが正しいであろう。というのは熊本市立商業学校が開校したのはずっと後の明治29年（1896）4月1日だからである。

御幡雅文について中国語教育史上特筆すべきことは、代表作『華語跬歩（明治19年）』をはじめ、大量の中国語教科書を著作し、中国語教育の面で大きな業績を残したことであろう。六角恒廣『中国語関係書目』（不二出版、1985年）によると、ほかに『官商須知文案啓蒙（明治22年）』『滬語便商（25）』『滬語便商意解（25）』『警務必携台湾散語集（29）』『燕語生意筋絡（36）』『滬語津梁（40）』『増補華語跬歩総訳上下（43）』などがある。

では御幡は濟々黌でどんな教え方をしたのだろうか。『漢語師家伝』（147～151頁）によると、「初めは、主に物の名前など教えて、それによって清国語の音をおぼえさせた。そのような段階がすむと、自分が東京外国語学校や北京留学の際に学習した『語言自邇集』にならって、短い語句を配列した“散語”をやって、清国語の調子に馴れさせた。次の段階は“問答”で、短い対話をやった。…清国語の教科書の必要が大きくなってきた。幸いにもかねてから執筆してきた教科書も、この頃にはそろそろ脱稿するようになった。そこでこれを活版で印刷するよう準備をすすめた。そして明治十九年の夏にいよいよ出版されることとなった。この本は名づけて『華語跬歩』とし著者名も「瓊浦揮肅」とした。「瓊浦」は長崎の別称であり、「揮肅」とは号である。時に御幡雅文二十八歳である。…この本が出版されて、御幡雅文は、鎮台・偕行社・濟々黌そして市立商業学校における清国語の勉強に使うこととなった。それまでは教科書もなく、黒板に語句や四声を書いて勉強してきたので、教える方も生徒たちもおおいに助かった。」というように、この熊本時代は先行の各種教科書を参考に、自分なりの教科書を編み、中国語教授法を工夫しようとし

た彼の中国語教育の出発点にあたっている。

明治17年(1884)8月7日、日本の民間人が初めて海外に設置した学校である東洋学館が設立された。熊本人を中心とした大陸での活動の一つでもある。「近ごろ熊本の有志者は清国上海へ東洋学校を設けるとかの噂ありしが、弥よ同地の日下部、宗像政<sup>30)</sup>及び薩摩の和泉、長谷場等の諸氏申合せ、上海へ東洋学館と云ふを設け去る七日より開館せられし由」(『朝野新聞』明治17年8月14日<sup>31)</sup>)。『紫溟新報』にも、「東洋学館趣意書」(明治17年8月9日)、「東洋学館綱領」(明治17年8月10日)が掲載されている。東洋学館は清国民衆との協調意識をもつ自由民権系の人達によって設立されたものであり<sup>32)</sup>、もっぱら中国語と英語を教授した。しかしすぐ行き詰まり、『亜細亜学館』(館長は末廣重恭)として再建されたのもつかの間、資金難、当局の不許可などで明治18年(1885)わずか1年の命で解散した<sup>33)</sup>。この東洋学館は、のちの日清貿易研究所、東亜同文書院の先鞭をつけた学校として知られる。

明治17年(1884)11月2日、佐々は清仏戦争視察のため、紫溟学会(紫溟会の政社組織を解いたもの)の代表視察員として宗方小太郎、佐野直喜の二名を伴い、中国上海に渡った。佐々は12月20日帰国するが、宗方・佐野の両名は中国に留まり、宗方は紫溟学会の機関紙、「紫溟新報」の上海通信員となり、佐野は山東省の芝罘に派遣されて情報活動にあたった。二人はこのあと中国に渡ってきた井手三郎・前田彪・緒方二三などと中国における日本人の中心として活動した。中国大陸における熊本国権党系実践集団の具体的活動が開始される。

明治18年(1885)9月、済々黉ではまた大いに規模及び組織を拡張し、皇漢学科、独逸学科、英学科、支那語学科の四科を並立し、各六級となし、毎科に経学・皇典・読書・作文・歴史・算術・代数・幾何・地理・経済・法律・倫理・習字・歩兵操練・撃剣を課し、独英支の三科には除科の法を設け、また別に予科を置く事にした。「支那語学科」はもとのままだが、ここに初めて「独逸学科」が置かれ、県外より教師を招いている。

ところで、この年佐々が語ったとする「支那語学科を設けしに就いての談話」(明治18年冬)が『克堂佐々先生遺稿』に収められている。なぜ中国語学科を開設したかについて、佐々の中国語観、中国観がうかがわれるので、ここに全文紹介してみる。

この文書には前書きがあり、「済々黉夙に支那語学科を設け生徒の此の学科を修めし者一時数十名後ち学科の大改正を行ひ同科は遂に廃止することとなりしも其の生徒は其の学習する所を以て遂に清国に渡行したるもの十数人今或は尚ほ語学を修むる者あり或は既に各港に散在して商業に従事する者あり皆将来望を属すべきの壮年なり。思ふに他日必ず彼地に在りて其の志す所を遂げ以て往日済々黉に在りて学習したるもの光を放つならんか。支那語学科を設くるの始めに当り先生左の如き談話をなしたり」とある。済々黉の学制が改革され、支那語学科・英学科が置かれたのが、明治17年4月。明治18年9月の改正でさらに独逸学科を置いた。翌年9月に支那語学科は廃止されているので、この前書きが書かれたのは、明治19年(1886)以降である。本文は次の通り。

支那は我国に隣するの大国にして其の土地の広く人口の多きこと東洋の諸国に冠絶するは諸子の明に知る所なり。而して支那我国に密接の関係ありて所謂輔車相依の勢いを有すること他の諸外国の比に非ざるは独り歴史上の陳談のみにあらず。之を我国の外交上より観察するも之を我国の貿易上より観察するも今日に当りて我国と密接の関係を有する者、孰か清国に愈る者あらんや。舊に今日一時の勢を然りとすにあらざ。将来に至りて益々此の関係の重を感じざるべからざること少く東洋の形勢に注目する者の明に覚知すべき所なり。然るに独り恠む、現今我国社会の眼光は専ら西洋の一方に傾き外交の事貿易の業一々西洋に傾かざるなく而して彼の一葦帯水の外、巨然たる一大国ありて陰然我国と一条の鉄鎖を連ぬるを顧みざるは何故ぞ。思ふに之畢竟維新以来泰西の事物我国社会の表面を風靡し大に国民の耳目を攪乱眩迷し

人々をして殆ど他を顧みるに違あらざらしめしの致す所なりしと雖も抑も亦豈近を棄て遠に馳せ旧を厭ふて新に就くの弊に陥りたるものはあらざるか。

抑も今日泰西諸国の我国に関係ある事は固より言をまたざる所なり。政治上の事社会上の物凡そ今日に於て我国を風動する一に泰西の事物ならざるなし。此の時に当て世人の眼光彼の辺に注ぐ事固より故なきにあらざれども清国の我国に関係ある事は亦た他の及ぶ所にあらず。其の境域相接し其の人種相同く其の文学亦相異らず。而して両国の貿易は年を逐ふて益々発達する勢あるは勿論東洋の形勢上より之を論ずるも宜しく彼と相結託せざるべからざるや明なり。而るに漫然として之を顧みざるものは実に世勢に通ぜざるの甚だしきものと言はざるべからず。然れども他人の不注意を咎むる者は宜く先づ自ら注意する所あらざるべからず。難を人に責めて、我独り其の勞を辞す。豈に男子の爲す所ならんや。是れ本龔の支那語学科を設けたる所以にして、思ふに諸子の此の学科を修むるも亦此の意に外ならざるべきを信ずるなり。

抑も他国の事物を学び他国の形成に通ぜんと欲せば、宜く先づ其の語に通ぜざるべからず。是れ事を始むるの順序なり。世には一種の人物あり、大に日清の形勢を論じ兩國の関係忽にすべからざるを説くと雖も其の身未だ彼の国の語に通ぜず。其の足未だ彼の国土を踏まず。是を以て其の口喋々として論述する所ありと雖も能く其の手を下すの方法を知らず。故に其の見識固より彼の日清の関係を顧みざる者に比すれば頗る称すべきものなきにあらざれども、帰着する所空疎無用の一論客として終るのみ。豈に何の益する所あらんや。今や諸子は方に支那語学を修めて徐々に清国に向て為す有るの準備を為さんとす。是れ実に喜ぶべきの事なり。

宜しく眼光を高所に着けて徐に其の歩を進め怠らず躓かず孜々勉強して、大に熟練する所あり以て他日清国に渡行し、親く彼の地を踏みて其の風俗を知り土宜を詳にし、或は貿易に従事し或は其の他の業務に奔走せざるべからず。是れ即ち本龔の此の学科を設けて諸子を教養する所以なり<sup>34)</sup>。

また、同時期に「独逸学科を設けし時の談話」(明治18年)という次のような文書がある。佐々の語学観を対比的に考察するため、一部紹介する。これにも前書きがあり、「明治十八年冬、濟々龔始て独逸学科を設け先生独逸学科生徒を集めて左の如き談話を為したり」とある。本文は、  
…今や独逸学の勢力甚だ盛にして都鄙の諸学校到る処に之を教授せり。…実に独逸国は他の諸外国に勝れて完全なる學術を有し、独り医学の一科を以て其名を世界の學術界に高くするのみならず、政治、經濟、法律等の諸学に至りても、亦た大に進歩の名を博せり。殊に其の立国の本体頗る我国に似たるものあり。故に斯学を講じ、斯文を修めて、能く之を我国に利用するときは其我國の文明を裨補し我國の開化を増進すること、決して疑を容れざるなり。諸子は今や此の学を學習するの途に上る。宜く大に其の勉強力を鼓して深く造詣する所あらざるべからず。…<sup>35)</sup>

のようである。二つの文書を比較して見ると、両外国語の位置づけ、佐々の熱意が相当違うことが分かる。

「支那語学科…」では、「清国は隣の大国、歴史上のみならず今日でも外交上貿易上密接な関係を有する。西洋一辺倒の風潮は嘆かわしい。其の人種相同じく、其の文学相異ならない故、貿易上のみならず東洋の形勢上からみて清国と相結託すべきだ。そのためには中国語に通じ、清国の事物を学び、清国の形勢に通ずる必要がある。これは他日清国に渡航し、親しく地を踏み、風俗を知り、土宜を詳らかにし、或いは貿易に従事し、或いはその他の業務に従事するためである」と中国語を学ぶ効用・目的を説いている。

佐々の談話には「彼と相結託」という言葉が一カ所見られる。これは興亜会・紫溟会以来の特にアジア主義の延長線上にある言葉である。当時の世論は前年(明治17年)の朝鮮での甲申事変を経て日清関係は悪化しており、また、福沢諭吉の「脱亜論」もこの年書かれている。これらの世論と距離を置いた佐々の話は前年の清仏の際、「紫溟新報」が主張したロシアの勢力拡大の脅威に対抗する日清連合、提携論の主張<sup>36)</sup>とも近い。

ただ、談話には興亜会や紫溟会の主張に見られた、危機感や情熱が薄いように感じられる。それは「清国に向て為す有るの準備」「或いは其の他業務」などぼかして述べてあるせいかもしれない。結論部分では「他日清国に渡行し、風俗や土宜を詳にして、或いは貿易に従事し」と一般化

してあり、むしろ貿易という言葉が4回使われているように、相手の国での安易な実用・実践面（国権意識）の方が色濃く表にでてきているのは、談話の相手が生徒だからか、話題が中国語学だからだろうか。

一方、「独逸語科…」では、「諸外国に勝れて完全なる學術を有し、医学・政治・經濟・法律等の諸学においても進歩している。ことに立国の本体頗る我が国に似ている。これを学ぶことは我が国の文明を裨補し、開化を増進する」と熱意を込めて薦めている。近代日本は西欧近代の政治・經濟・文化を受容して近代化を実現してきたわけで、当然の言であるが、同じ実利にしても言葉を使って得られるもの（中国語）、言葉から直接得られるもの（ドイツ語）、かく薦められた学生はどう考えたであろうか。もし佐々の言に従うなら、中国語は現地で学ぶのが効率的であろう。日本の学校で学ぶ必要はあまりない。現に、東洋学館、日清貿易研究所、東亜同文書院のような日本人による中国語学校が中国に設立されたし、日本での学校における中国語開設が商業学校どまりであったのは、この見方を裏付けている。中国語は人間形成に関わる文化語学ではなかった。

この当時（明治18年〔1885〕前後）、佐々の関心はドイツ語（ドイツ）にあったようだ。安達謙蔵は、「先生は夙に独逸学の緊要なるをことを認めて、もっぱら独逸学を奨励され、東京からわざわざ独逸語教師として山県良蔵先生（山口県人）を引っ張って来るほどの熱の入れかたであった」と述べている<sup>37)</sup>。また佐々のドイツへの関心を示すものとして、「独国の祝日には女童迄も謡ふ所は悉皆忠君愛国ならざるなし…軍歌並唱歌必要の空気を今日より龔内に流通さする様御注意有之度候」と安達・蓑田・朝山宛に書き送っている<sup>38)</sup>。佐々のこのドイツへの傾倒は、同郷の先輩井上毅、彼の友人古庄嘉門の影響によるものであったが、プロシヤ的憲法体制を支える国民教育を推し進めようとしていた森有礼から濟々龔が後にモデルスクールとして認められた事とも関わっていくであろう。

#### 「支那語学科」の廃止

明治19年（1886）9月、濟々龔ではまた大いに学科を改正し、皇漢、独、英、支の四科並びに予備門を廃し、合して普通科とし、五ヶ年の課程とした（従来は三ヶ年）。科目の中で外国語は英語とドイツ語だけ、「支那語」はとうとう廃止された。それによって「御幡雅文、永田平太郎、…諸教師及蓑田喜太郎…諸氏の助手ヲ解ク」（「濟々龔歴史」）と11名のリストラされた人員の中に御幡も入っている。代わりに2名の英学教員、1名の独逸学教員が招聘された。明治14（1881）年2月から5年半ほど細々と続けられてきた中国語教育はここで途切れた。以後今日まで、濟々龔で中国語の授業が正規の授業に採り入れられたことはない。

もっとも、中国語の授業は支那語学科の学生に対し、翌年春まで続けられていたようである。というのは明治20年（1887）1月、森有礼文部大臣が濟々龔を視察した時、それを報じた「熊本新聞」（明治20年1月20日）に、「文部大臣学校巡視」と題し、次のような記事があった。「森文部大臣一行には昨十九日午前第九時四十分の旅館を出でて先づ区内の手取小学校へ到り…次ぎに濟々龔へ到られしが大臣の着せらるるや生徒は兩組に分れて撃剣を初めたり…それより大臣は佐々友房、浅山知定兩氏の先導にて教室を巡視し英語独逸語支那語の學習就中支那語の對話等を一見され夫より寄宿室食堂食物等をも一覽されしが…」。

廃止された中国語を、森文部大臣がなぜ見ることができたか疑問に思っていたが、明治19年8月17日付「紫溟新報」（雑報）に「支那語学と論理学」という題で次のような記事を見つけ、疑問が氷解した。「今度濟々龔に於て学課上の改革を行ひ従来の支那語学科を廃するに付ては今まで同学科を修め居りし生徒には今後と雖も其業を卒へざるまでは尚ほ同学科の教師に従ひて修学せ

しむると云ふ尤も論理学課も今日まで学び来りし生徒には其望みに応じて修学せしむるの都合なりと聞く」。

当然のことだが学生を卒業まで面倒をみたわけで、教師の御幡雅文も翌年春学生が業を終えるのを見届けて、長崎に帰ったようである。森文部大臣は「就中（なかんずく）支那語の対話等を一見され」と中国語の授業に興味を持ったようだが、会話中心（実用語学）の授業風景がうかがわれる。

それでは、なぜ中国語はこの期に及んで廃止されてしまったのだろうか。いろいろ理由はあると思うが、私見では「済々黌の在野性の放棄」、これが中国語の扱いに端的に表れたものだと考える。同心学舎を設立した頃の佐々は西南戦争で敗れた賊軍で、戦犯であり、完全に反政府的立場、在野的立場であった。にもかかわらず、政治的立場や教育的立場は国権主義、国家主義的、天皇中心主義であり、このことが明治政府の推し進めようとする政治や教育と、次第に波長が合い、距離を縮めていくようになった。そのよい例が明治15年(1882)5月21日、天皇から500円下賜されたことであり、明治20年(1887)1月の森有礼文部大臣の済々黌視察である。森有礼は視察の後「自分は此れまで幾多の学校を参観して何時も失望して居たが今度初めて学校らしき学校を見た」<sup>39)</sup>と述べ、彼の描く理想的な教育をここに見いだしている。佐々も賛意を表し、従来、政府の教育方針に対して見せていた彼の露骨な批判的態度を捨てた<sup>40)</sup>。となれば、「(筆者注：同心学校の)学科は…今日の普通科に比して余程単純なものであった」(宇野東風<sup>20)</sup>)課程は、まともな中学になるように、それにふさわしく整備しなくてはならない。

これまでの数度にわたる学科の改編、明治20年(1887)10月19日の「官公立中学校同等の認可申請許可」(私立学校で初めて。文部省に出された申請書によれば、第一外国語は英語、第二外国語はドイツ語)、明治20(1887)年12月15日の紫溟学会の勢力が強い県議会での予算否決による「県立熊本中学校のとりつぶし」、明治21年(1887)1月新制による尋常中学校の組織への切り替え(尋常中学校課程をそのまま採用)、明治27年(1894)4月の県費の補助を受ける熊本県尋常中学済々黌の発足などは、その経緯を示すものであろう<sup>41)</sup>。中央から見ても「熊本には済々黌と云う学校がありまして、それは土族及有志者連中の相集て設けた学校であるが、初めは不規則でありましたが、近頃に至り段々に改良して文部の課程に当嵌る様になりました」(明治22年3月9日、井上毅演説)<sup>42)</sup>と認めている。

また、明治19年(1886)4月、文相森有礼の見解が大きく反映した中学校令が公布されたのも理由にあげられるであろう。中学を尋常中学(5年)と高等中学校(2年)とするもので、その「尋常中学校ノ学科及其程度」によれば、教科は倫理・国語及び漢文・第一外国語・第二外国語もしくは農業・地理・歴史・数学・博物・物理・化学・習字・図画・唱歌・体操であったが、普通科とくに英語が重視された。明治27年の改正では、第二外国語は廃されて第1外国語(英語)だけになった。一方、高等中学校では第一外国語は通常英語、第二外国語は通常独語もしくは仏語とされた<sup>43)</sup>。

こういった経緯を見ると、中学校の課程にそぐわない中国語が消えていくのも必然であったろう<sup>44)</sup>。明治18年(1885)冬、佐々が学生の前で中国語を薦める談話をした舌の根も乾かぬ明治19年(1886)9月、全国でも希有な中国語学科は廃止の憂き目にあった。中国語は「大雅の堂に登らざる」(上品な所に出せない)語学であったからである。

ここで済々黌で中国語を学んだと思われる主な生徒の事績を記しておく。

1 井手三郎(1862~1931) 飽託郡中島村出身。明治16年済々黌に入り、18年本科を卒え高等科を修

め、兼て中国語を勉強した。「その時支那語を研究したのが、緒方二三君を始め二十七、八人、私もその一人であったが、二十歳前後の少壮気鋭の者ばかりであった。…私は先生の命によって『支那に於ける肥後人』といふ冊子を作った」(井手三郎「熊本人の対支活動の源泉」、『克堂佐々先生遺稿』585頁)。明治20年清国に渡り、漢口の荒尾精の楽善堂を足掛かりに調査活動をした。日清戦争で通訳官、戦後台湾から福州へ渡り、前田彪と漢字新聞『閩報』を創刊した。明治31年宗方とともに東亜同文化会の設立に参加。明治37年邦字紙『上海日報』を創刊し社長となる。明治39年東亜同文書院院長代理を務める。明治45年と大正4年に衆議院議員に当選。東京大学法学部近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)に井手文庫がある<sup>45)</sup>。

2 緒方二三(1867~1941)号は南溟。下益城郡杉合村出身。明治16年済々黌に入り、御幡雅文について中国語を習った。明治21年佐々の指示で片山と清国に渡り、漢口の荒尾精の楽善堂を足掛かりに調査活動をした。「私が初めて支那に渡ったのは明治二十一年春、同じ済々黌で支那語を学んだ片山俊彦君と一緒にした。」(緒方二三「対支経済事業への御尽力」、『克堂佐々先生遺稿』599頁)日清・日露戦争で通訳官。帰国して、水産業に従事し、熊本県水産組合長になる。大正7年熊本海外協会の設立に参加。また昭和13年阿部野利恭と熊本県支那語学校(現在の熊本学園大学の前身)を設立した。著書に『清国通商総覧』がある。

3 片山敏彦(1869~1910)益城郡御船町出身。明治16年8月済々黌に入学。「済々黌在学中神林某に就て支那語を学び、更に御幡雅文に就て深く之を修め」(『東亜先覚志士記伝』229頁)。明治21年佐々の指示で緒方と清国に渡り、漢口の荒尾精の楽善堂を足掛かりに調査活動をした。明治23年日清貿易研究所の教師、明治25年から明治27年まで九州学院の教師として漢文を教えた。日清戦争で通訳官。明治30年外務省領事館通訳生に任じられ、蘇州に在勤、後領事代理となる。日露戦争で陸軍通訳。明治40年領事代理沙市に在勤となる。「漢学の素養深く、支那時文及び支那語に巧みなること他の追随を許さず…熊本出身の支那通としては宗方小太郎と相並んで、その風格態度は共に圧巻とされた」(同前書230頁)。

4 前田彪(1886~1915)済々黌に学び、明治20年渡清し、漢口の荒尾精の楽善堂を足掛かりに調査活動をした。日清戦争では、諜報任務にあたり、通訳官も務めた。明治31年福州において漢字紙『閩報』を経営、屈指の大新聞とした。

これらの人達は、佐野や宗方に続き明治20年から21年にかけて中国へ渡った、いわば第二陣で、いずれも漢口の荒尾精が軍事調査の根拠地にしていた漢口の楽善堂を足掛かりにしている。

(続く)

## 注

- 1) 竹内好「支那語について」、『中国文学』第78号、1941年(安藤彦太郎『中国語と近代日本』、岩波新書、1988年、15頁に引く)。
- 2) 上村希美雄「辛亥革命と熊本」、『熊本学園創立50周年記念論集』、1992年、207頁。
- 3) 紫溟会や国権党についての研究については、佐々博雄「熊本国権党系の実業振興策と対外活動—地域利益との関連を中心として—」(『国士館大学文学部人文学会紀要』第24号、1991年)に紹介がある。
- 4) 済々黌は明治36年(1903)、火災に会い、草創期の資料の多くが失われた。
- 5) 例えば、「津田静一は熊本学館に中国語科を特設し、数十名の通訳官を急造して戦地に送った」(『熊本県史』近代編第二、昭和37年、696頁)、「なおまた本黌では、当時(筆者注：日清戦争)とくに臨時清語学科の速成教習生を募り、これを啓導して、戦役中公事に従事せしめた者が60余人に達したのであった」(『済々黌百年史』、昭和57年、89頁)など、日清戦争時に中国語速成科を置いた学校がまちまちである(実際は九州学院)。明治24年(1891)済々黌・熊本学館などが統合され、九州学院となったので、関係者の記憶違いであろう。
- 6) 六角恒廣『近代日本の中国語教育』、淡路書房、1961年、37頁。氏の近著『中国語教育史論考』(不二出版、1989年)では五期に細かく分けられているが、熊本における中国語教育に当てはめて見た場合、前著の分け方のほうが考えやすいので、これに従った。

- 7) 佐々博雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について—熊本国権党系集団の動向を中心として—」、『国土館大学文学部人文学会紀要』第27号, 1994年, 47頁。
- 8) 『清国ニ於ケル肥後人』は、佐々友房の依頼により、井手三郎が書いた。国立国会図書館憲政資料室所蔵「佐々友房関係文書」所収。
- 9) 私(野田寛)が此嚢に入学した当時、「済々黉は藩学時習館の復興を予期して造った」と佐々先生は語られた(『肥後文教と其城府の教育』, 熊本市教育委員会, 昭和31年, 393頁)。
- 10) 『熊本県教育史』上, 熊本県教育会, 昭和6年, 55頁。
- 11) 佐々瑞雄『佐々家覚書』, 「佐々家覚書」刊行会, 平成元年, 213頁。
- 12) 晩年の著者(狩野直喜)は、ある人に向かい、僕は国にいたころ、大たい学問は出来ていたんだよ、と語った(狩野直喜『支那文学史』吉川幸二郎解説, みすず書房, 1970年)。東京大学の学生であったころから中国口語を勉強し、留学によってその能力を一そうにした(狩野直喜『支那学文藪』再刊本吉川幸二郎解説, みすず書房, 1973年)。
- 13) 熊本県における明治期の朝鮮語の教育については、鄭鳳輝氏に「19世紀末熊本県人の韓国語教育」(『海外事情研究』第24巻第1号, 1996年, 熊本学園大学海外事情研究所)のすぐれた論考があるので、参照されたい。
- 14) 国立国会図書館憲政史料室所蔵「佐々友房関係文書」所収(『済々黉百年史』, 済々黉百年史編集委員会, 昭和57年, 74頁)。
- 15) 五代友厚文書「興亜会規則」(黒木彬文「興亜会の基礎的研究—会報の分析を中心として—」, 『近代熊本』第22号, 1983年, 177頁)。
- 16) 前掲8) 肥後生『清国ニ於ケル肥後人』。
- 17) 「興亜会報告」第六集, 5頁(前掲〔15〕黒木論文, 183頁)。
- 18) 前掲15) 黒木論文209頁の興亜会会員一覧表(明治12年4月10日~7月30日)には見えず、佐々友房は白木為直とともに、後日入会者の名簿に載せられている。
- 19) 上村希美雄「『紫溟雑誌』のアジア同盟論(近代日中関係史と熊本5)」, 『熊本日中交流月報』第五号, 昭和59年8月20日。同氏論文「熊本国権党の成立」(『近代熊本』第17号, 1975年)の“6アジア主義と万国共和政府の思想”参照。
- 20) 「回想録 宇野東風氏談話」, 『創立三十周年記念多士』, 明治45年, 19頁。
- 21) 六角恒廣『中国語教育史の研究』, 東方書店, 1988年, 123・170頁。また同氏「陸軍と『支那語』」, 『近代日本の中国語教育』, 淡路書房, 1961年, 169頁も参照。
- 22) 本山幸彦「明治時代における国家主義教育の—源流—熊本—の紫溟会と済々黉の関係をめぐって—」, 『京都大学教育学部紀要』6, 1960年, 39頁。
- 23) 前掲15) 黒木論文85頁に載せる興亜会支那語学校就学生の名簿に上林大三郎の名前が見えるが、この論文では上林大三郎の事績は分からないとなっている。
- 24) 前掲21) 六角恒廣『近代日本の中国語教育』第3章「語言自邇集」について, 117頁。『亜細亜言語集』については、前掲20) 同氏『中国語教育史の研究』に「第3章『亜細亜言語集』の刊行をめぐって」がある。
- 25) 前掲21) 六角恒廣『中国語教育史の研究』, 282頁。
- 26) 前掲21) 六角恒廣『近代日本の中国語教育』, 61頁。
- 27) 前掲11) 佐々瑞雄『佐々家覚書』, 269頁。
- 28) 対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』下, 原書房, 昭和11年, 357頁。
- 29) 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』下, 原書房, 1972年, 134頁。
- 30) 宗像政と日下部はともに西南戦争で賊軍(協同隊・滝口隊)として戦い、その後宗像は相愛社, 日下部は東洋社会党に抛り、民権運動に奔走した。宗像はのち政友会代議士, 東京府知事となった。
- 31) 前掲21) 六角恒廣『中国語教育史の研究』272頁。
- 32) 佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」, 『国土館大学文学部人文学会紀要』第12号, 1980年, 65頁。
- 33) 東洋学館については、佐々博雄氏の論文のほか、前掲六角恒廣『中国語教育史の研究』にも“IV篇 上海に進出した「支那語」教育”の論考がある。
- 34) 『克堂佐々先生遺稿』, 佐々克堂先生遺稿刊行会, 昭和11年, 212頁。
- 35) 前掲34) 『克堂佐々先生遺稿』215頁。
- 36) 前掲32) 佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」, 68頁。紫溟会の清国観については、同氏「熊



- 本国権党と朝鮮における新聞事業」、『国土館大学文学部人文学会紀要』第9号, 1977年にも考察がある。
- 37) 安達謙蔵『安達謙蔵自叙伝』, 新樹社, 昭和35年, 22頁。
  - 38) 明治18・9年頃の書簡。前掲34)『克堂佐々先生遺稿』427頁。済々黌におけるドイツ学, 中国学について富田啓一郎『考証「鳥居素川」(上) 明治大正期・言論人の周辺』, 共同体社, 1998年に考察がある。
  - 39) 野田寛「余が目に映じた佐々克堂先生」(前掲〔35〕『克堂佐々先生遺稿』, 506頁)に見える回想による。
  - 40) 前掲22) 本山幸彦「明治時代における国家主義教育の源流—熊本の紫溟会と済々黌の関係をめぐって—」, 42頁。
  - 41) これらの経緯(明治初期の熊本における中学校の変遷)については花立三郎「明治10年代の熊本における政治と教育」, 『季刊日本思想史』第7号, 1978年, 同氏「熊本県における中学校の設立事情(一)(二)」, 『九州教育学会研究紀要』第2号・第3号, 1953年・1954年を参照。
  - 42) 大久保利謙『森有礼』3頁(前掲〔22〕本山幸彦「明治時代における国家主義教育の源流—熊本の紫溟会と済々黌の関係をめぐって—」, 41頁に引く)。
  - 43) 『日本近代教育史事典』(7) 中等教育, 平凡社, 昭和46年, 104頁より。
  - 44) 「自今は生徒を教授するには高等中学校, 陸軍士官学校, 其他の専門学校に入得る資格を養成するの目的なりと云へば同黌生徒の学識は今後倍々発達して黌運一層隆盛を極むるに至らんかと察せられる」(「紫溟新報」済々黌の学科改革, 明治19年8月15日)というように, 進学が重視されれば, それにかかわらぬ科目が疎外されるのは今も同じである。
  - 45) 東京大学法学部近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)の井手三郎文庫に『亜細亜言語集』(巻1, 2, 3, 4, 7)と『華語跬歩』(明治丙戌〔19年〕夏月, 出版地出版者不明)が所蔵されている。これを見ると, 『亜細亜言語集』では巻1だけ(第13章まで)に赤丸印(四声)と赤鉛筆のL印(段落)を施すのみで, 他の巻には書き込みがない。これに対し, 『華語跬歩』には見返しに「日東處土 井灌田」の署名があり, 全書にわたって行間と本文の上欄に多くの書き込みがある。例えば, 「大夫」の横に「醫生」, 「迷迷湖湖」の横に「不明白」など別の言い回しや用例が書かれ, 特に最後の「東中問答」篇には, 上欄に言い回しを若干変えた本文がびっしり写されている。御幡雅文の授業と井手三郎の勉強ぶりがうかがえる資料である。